

『未知のものへの感性磨く』

幼いころから本に親しんできた。

父母は本好きで、家には本があふれていた。テレビ局勤務だった父が、番組製作の参考に買ったさまざまな分野の本を自由に読んだ。小学2年生からは「少年少女世界の名作文学」(全50巻、小学館)に夢中になった。古典に詳しい母には、『平家物語』は口語だから読みやすいと教えてもらった。

家族で釣りなど、生き物に親しんできた。父親の興味から歴史や考古学にも関心が向き、『楼蘭』なども読んだ。

『モゴール族探検記』は、1955年に実施された京都大学の探検の記録で、人類学、植物学などの専門家がアフガニスタンやパキスタンに赴いた。隊長であった遺伝学者の木原均先生が、野生小麦から栽培小麦への変遷を解明したことに興味を持ち、進路を農学部を決めるきっかけとなった。

実際に進学したのは、林学の分野だった。

第1志望の学科には入れず、林産工学科に進んだ。『野山の木(1.2)』(堀田満著)を手に森のなかを歩き、樹木の名前を覚えた。動物行動学の本『ソロモンの指環』を読み、観察眼に驚いた。英語力を身につけたくて、英語の推理小説を読んだ。翻訳だと女性言葉が妙に強調されて、違和感があったのも一因である。樹木の組織や生理学に興味を持ち、博士課程のときに、病理解剖の仕事から森林病理学という今の専門に出合った。

女性がまだ少ない森林学の分野で、道を切り開いてきた。

国家公務員試験を受け、農林水産省の林業試験場(当時)に配属された。大学院時代に結婚しており、子育てしながら仕事をした。「自分は奥さんに仕事を辞めさせた」と言ってくる人もいたが、頑張っていれば公正に見てくれている人はいる。女性には周囲に遠慮せず、面白いと思ったことを突き詰めていってほしい。レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』は、未知のものを関知する能力とでもいうのだろうか、研究者の目につながる。幼少期のこの力を大人が潰しているのではないか。子育て中の人に読んでほしい。『沈黙の春』の著者の絶筆である。『コンタクト』の主人公の女性科学者には、女性としてやマイナーな分野の研究者として苦勞する点で共感できた。科学者がキリスト教の教義との板挟みに悩む場面も勉強になった。

日本の森は人の手で維持されたものが中心で、それが放置され、病気が発生しやすい状況である。『日本人はどのように森をつくってきたのか』は、平易に書かれた解説書である。今は予防医学の観点から、森林の健康維持に取り組んでいる。森林保全に関わる人々に、いかに科学的な知識を伝えていくか。社会とつながり、研究成果を還元していくことが大事であると考え。 (聞き手は編集委員 辻本浩子)

【私の読書遍歴】

《座右の書》『センス・オブ・ワンダー』(レイチェル・カーソン著)。『Contact』(カール・セーガン著)、著者は有名な天文学者。ぜひ原語で読んでほしい。

《愛読書など》(1)『The Lost World』(マイケル・クライトン著)。著者は医学専攻、読みやすい英語。科学技術を安易に使うことへの警鐘を感じる。(2)『聊齋志異』(蒲松齡著)。中国清朝の怪奇短編小説集。(3)『平家物語』(岩波文庫など)(4)『楼蘭』(井上靖著)。(5)『モゴール族探検記』(梅棹忠夫著)。(6)『ソロモンの指環』(コンラート・ローレンツ著)。(7)『日本人はどのように森をつくってきたのか』(コンラッド・タットマン著)

くろだ・けいこ 1956年奈良県生まれ。京大博士課程修了(農学博士)。森林総合研究所関西支所地域研究監などを経て2010年神戸大教授。18年6月から現職。